

第2回鶴岡市総合計画審議会企画専門委員会（会議概要）

- 日 時 令和5年2月14日(火) 午後1時30分から午後3時40分まで
- 会 場 鶴岡市役所 別棟2号館 21～23号会議室
- 出席者 別紙委員名簿のとおり（委員14名中12名出席）
※安達忠士委員、クランプアレクシス委員は欠席
- 傍聴者 なし
- 報 告 第1回各専門委員会での協議・意見内容
→主な意見は下記のとおり
- 協議題等 (1)分野横断的課題・施策の展開に関することについて
→主な意見は下記のとおり
(2)「未来創造のプロジェクト」の取組について
→主な意見は下記のとおり
(3)その他（特になし）

○主な意見

【第1回各専門委員会での協議・意見内容】

(委員)

- ・防災に関して、自治会と市と学校が連携する取組についての意見があったが、ぜひ具体化するような取り組みを検討してもらいたい。
- ・災害の危険性を診断・確認するような仕組みがないので、地域の取り組みと小学校がうまく連携しながら、どこがどう危険なのかを学び、チェックするような具体的なアクションを自治会と小学校とで草の根的に広げてもらいたい。
- ・自立した防災システム・仕組みについては、市外を含め広域でうまく機能することが大事だ。
- ・防災では、近隣自治体との連携だけではなく、友好都市の江戸川区や墨田区等と、平時からの交流の活発化と併せて、災害時には広域避難の受入など、広域連携の視点も入れてもらいたい。

【分野横断的課題・施策の展開に関することについて】

計画策定の視点

(委員)

- ・分野横断的な課題と施策の展開に関して、市民の主体的な参画という視点も大事ではないか。主体的な市民が育つことによって鶴岡市も良くなるのではないか。

成果指標（KPI）の見直し

(委員)

- ・KPIの見直しについて、事務局から示された4つの方向性は適切であると思う。
- ・見直し理由はしっかり残し、その理由を辿れるようにしておく必要がある。
- ・with コロナは必須事項であると捉えるべきだ。
- ・コロナでダメージを受けたためKPIは芳しくないが、ここまで戻したから満足度は100だということも考えられる。そういうことも含めてKPIを考えないと、数字が独り歩きしてしまうところがあるのではないか。フォーラムや研修会、勉強会などで市民と学ぶ必要性がある分野だと感じる。
- ・KPIの達成度と市民の満足度がイコールになっているかが気になる。

- ・市民が総合計画を知らなければ、市民は達成度も知ることができない。市民に総合計画を知ってもらうことが大事だ。
- ・KPI（業績評価指標）やKGI（目標達成指標）は、目標に対する進捗率が明確になるので重要だと認識している。加えて可能であれば実際に市民が満足しているのかが分かるような「定性評価」があってもいいかも知れない。実施方法として、例えばアンケートや市民からヒアリングする等でサンプルを取り、市民の意見を把握するやり方もある。
- ・前回の委員会にて、市民を巻き込んだ議論の場や勉強会の必要性が挙げられたため、今月から市内在住の有志と小さく「しゃべり場」を始めている。
- ・そもそも市の総合計画や取組みを知らない人も居ると思うので、まずは誰もが見やすい場所で情報を開示することが大切だ。一人ひとりが自身で情報を取りに行くことは難しいと思うので、例えば市のホームページのトップページからクリックして簡単に入れるような場所に掲載するなど、市民が容易に見られるところに掲載しているだけでも違うと考える。
- ・当たり前の話しにはなるが、KPIが目標に合致していることが重要である。目標達成のためのKPIの内容がズレていたり、例えば自殺死亡率の減少等、市側のコントロールが難しい内容をKPIに置くと、施策の推進とKPIに関連性を持たせることは難しいように考える。一つの方法として、KGI（目標達成指標）とKPI（業績評価指標）を切り分けて、自殺防止に関しては死亡率の減少を「KGI」として、その達成のための施策（例：市への相談件数等）を「KPI」とすると、施策の進捗率を見える化できるかも知れない。

デジタル化 (委員)

- ・医療介護福祉分野でもデジタル化を推進してもらいたい。
- ・デジタル化については、具体的な目標設定も必要だ。例えば、市民サービスの向上の視点で、分野横断的にデータ連携しながら付加価値を創出できるようなデジタルの仕組みの構築などが考えられる。
- ・窓口で複雑に分かれている市民サービスのワンストップ化や情報弱者をつくらないような仕組みづくりも考えてもらいたい。
- ・情報弱者をつくらない工夫の一つとしては、個々人の状況に対応したプッシュ型サービスへの移行などがある。
- ・デジタルデバインド対策としては、高齢者や視覚障害者など、さまざまな人が使えるようなデバイス開発などさまざまな工夫があると思う。
- ・デジタルは、必ずしも若い人だけが強いわけではい。高齢者であっても支援してくれる家族や支援者がいれば年齢は関係ない。
- ・高齢者の意見と若者の意見をどう反映させるかを考える必要がある。
- ・デジタルデバインド対策として、ITを使いこなせない高齢者に家族や支援者がいない場合には、市内在住の高専や大学生等からサポートを得ていくことが考えられる。
- ・サポーター側のメリットとして、民生委員のように例えば『デジタル推進委員』等の立場を付与する等、その役割に対して自負心が生まれるような仕組みができればサポートを拡大できるのではないかな。
- ・デジタル化を進める上でデジタル環境のハード整備は進んでいるのか。例えば、Wi-Fi環境はアートフォーラムですら整備されていない。観光地を含めハード整備の内部検証はしているのか。
- ・学校現場において、ICT機器を効果的に活用した授業を推進することは良いと考える。オンライン授業の浸透に当たっては、「使う」観点と「作る」観点の2つがある。

- ・「使う」観点では、感染症万全等での学校閉鎖時のみでの補助的な利用にするのではなく、ある特定の教科は全て ICT 機器を用いる等、常時利用の仕組みを検討してよいのではないか。例えば千代田区立麴町中学校では、数学のようなシステムティックな教科は全てアプリで完結している話を校長先生から伺ったことがある。
- ・次に「作る」観点では、小中学生向けにプログラミング授業も実施してもよいのではないか。現状の教師による指導が困難であれば、市内在住の IT フリーランス等の外部人材から出前授業等で活用すれば、不足した指導スキルの補填になり、社会に開かれた教育の推進にも繋がるかも知れない。
- ・義務教育へのデジタル教育の導入は議論があるところだと思うので十分に議論して、鶴岡にあった又は多様な教育のやり方が選べるような姿を検討してもらいたい。
- ・大体、新しい機器を導入するとそれに引っ張られる。是非、慎重に議論を重ねて、鶴岡にふさわしい方法で導入してもらえればと思う。

新型コロナウイルス感染症

(委員)

- ・総合計画というものは、まちづくりの歴史を示すような重要な文献的資料に将来的にはなっていく。この時代の大きな出来事は、やはりコロナウイルスの感染症の拡大だ。その影響を受けて、街がどう変わったかをまとめておく必要があるのではないか。

その他

(委員)

- ・各地域で市長と語る会があるが、市民は色々な要望を言って、その中からこれはいいと思ったことをやるケースがあるかもしれない。考えようによってはやや不思議な感じもする。できれば、総合計画に携わるような部署の職員が市民の声を直接聞くような時代になってきているのではないか。

【未来創造のプロジェクトの取組について】

(委員)

- ・現在の総合計画策定時に、これまでのような分野縦割ではなく、もっと横断的に取り組まなければならない時代ではないかという意見が多数出で、それによってプロジェクトチームを作って推進しようということ立ち上げられたものだ。
- ・当初、自分としては3つぐらいのプロジェクトをまず積極的に進めればどうかという目論みでいたが、事務局検討の結果、7本で走っている現状だ。

若者・子育て世代応援プロジェクト

(委員)

- ・若者の地元定着・回帰の促進に関連して、庄内総合支庁の郷土愛醸成の取り組みで、高校生と一緒に事業をしている。郷土愛醸成や若者の地元定着は、鶴岡市だけの問題ではなく庄内全体のことであり、担当職員の人材不足や予算の制約などがあるかもしれないが、一緒に行う方向性で考えてはどうか。
- ・鶴岡はいいところだと感じてくれている高校生が多い。特別なことではなくて、日常生活の暮らしの中で、鶴岡の良さを感じるきっかけ与えていったらどうか。
- ・自身も1年数ヶ月前に、東京から移住してきた。若者の地元回帰の促進では、全てのターゲットに向けて総花的に施策を実施するより、どのような若者が鶴岡に戻って来やすいのかを明確に定義した方がよいのではないか。例えば、鶴岡に縁がない人よりも鶴岡出身

者、転職を要する人よりも転職が不要な「テレワーカー」や「フリーランス」等。より移住を見込めるターゲットを絞り込み、施策対象を研ぎ澄ませるとより効果が出るかも知れない。

- ・島根県では家族で移住を考えている人などに対し、今後の支出がどうなるか、どの程度の収入が必要かなど家計の見通しづくりに着目し、アプリで支援を行っている。保育料が無償だとかそういう話も大事だが、島根のようなものもあっていいのではないか。
- ・そもそも、子育てや結婚は、費用を支援するからするものではないと思う。家族をもって幸せだ、親になって幸せだということを伝えていかなければならない。
- ・田舎に戻ってくる若者というのは、地域に貢献したいとか、地元が好きだとか、家族に恩返しをしたいとか、そういうことを主体的に考える人なんだと思う。そういう人を育て、大事にしていかなければならない。
- ・総合計画を読む限りは、鶴岡市としてはUターン・Iターン・Jターンどれも等しく促進するという理解でいいか。例えば、この先5年はUターンを一番力入れて促進するというようなやり方の方がわかりやすいかもしれない。
- ・それぞれの動力や促進するエネルギーは、時代によって違うような気がする。Iターンであればテレワークやデジタル化などを推進しなければならないし、Uターンであればふるさとに貢献など、質的に違う動機がある。それ上手く整理して、わかりやすい展開が必要であると感じた。

全世代全対象型地域包括ケア推進プロジェクト

(委員)

- ・「人生会議（ACP）」をひとつのキーに据えて取り入れてもらいたい。将来起こるであろう健康上の問題に対する自分自身の考え方や生き方、過ごし方を一人ひとりがしっかりと考えることによって、また人に伝えることによって、この地域に足りない部分や自分にとって足りない部分又は学習しなければならないことがはっきりしてくるのではないか。
- ・病院に入院させてしまえば、病院に任せきりで退院支援もできず問題になっていると病院職員から聞いている。病院職員も人生会議（ACP）をする場が必要だという声があるので、ぜひ加えていただきたい。
- ・農福連携でマッチングが実際進んでいるのか知りたい。効果として、人材不足の解消、障害者の働く場の確保のほかに、障害者の精神的な安定にもつながる。働くことは障害者にとって身体的にも精神的にも良く、全国的にも進められているようなので、今後も推進することが重要ではないか。
- ・医療福祉介護の人材、従事者の育成確保を重点項目として入れた方が良い。
- ・繭を育てることを福祉施設の子供たちにやってもらった。農福連携に関連して教育とも連携してできないか。

食文化・食産業創造プロジェクト

(委員)

- ・食文化の取り組みの基盤を一般家庭にしておかないと長く受け継いでいけないのではないか。外に向かって宣伝できても、肝心の地元で継承されていないと、うまくいかないのではないか。自分の家では他県出身の家族もいて、必ずしも鶴岡市の季節食、行事食をそのまま出来ていないので、この先の食生活が変わっていくのではないかと思う。食文化の継承については一般家庭に取り組みの基盤をもっていくべきと思う。
- ・食文化も変化するものであると思うが、移住者に鶴岡の食文化を紹介したり、伝授するような講座があってもいいかもしれない。

- ・子供が3歳の時に鶴岡ふうどガイドと朝日大綱の山の中に原木なめこを取りに行った。5歳になった今でも「なめこ取り、また行きたい。美味しかったね。」と言う。特別何か文化的な料理でなくても、食と体験がセットになった時にすごく記憶に残ることを実感した。
- ・そういう体験ができる環境が整っている場所なので、食の美味しさだけではなく、小さいうちから食を生活の中に密接に結びつける体験をさせていくなど、発達段階に合わせた取り組みを考えてもらおうと子育て世帯としてはうれしい。
- ・食文化体験と食育はきちんと区別することが重要だ。
- ・『毎日おいしいここで暮らしたい』というキャッチフレーズがある。人は最期まで、死ぬ直前まで食べたいという欲求は残っている。嚥下食の推進を料理との協力のもと取り入れていただきたい。
- ・高齢者だけでなく、子供の嚥下障害の問題もある。この障害があると、外に行って食べる機会も減り社会参加もできなくなるので推進をお願いしたい。
- ・嚥下食に積極的に取り組むことで、他地域との差別化にもなる。障害者とその家族が食を求めての旅行ということにも繋がっていく可能性もある。
- ・鶴岡食材を使った嚥下食を考える研究会では、うしお荘で嚥下食を提供し、全国各地から問い合わせが来ている。しかし、提供しているところがうしお荘しかないために、断ざるをえない状況があると聞いている。ぜひ対応する旅館や飲食店を増やしていくことを考え取り組んで欲しい。
- ・「三陸のカキは森が育てる」という有名な話がある。鶴岡の在来作物をはじめとする特徴のあるものは豊かな森があるおかげだ。森林文化都市とその食文化との関連性はもっと強調されるべきだ。森の手入れや森林の適正管理・育成にもつなげて、一体として提案すべき。
- ・地場産物の利活用拡大に関連して、鶴岡には在来品種や非常に多品種のものがあるが、小ロットで届けたくても、コストが見合わないので届けられないものもあると思う。いかに交流人口の拡大も含めそのようなものを届けられるか、運ぶ仕組みも十分に検討いただきたい。
- ・食文化に関して、食文化創造都市のネットワークというのも非常に重要だったと思う。ユネスコの考え方は、都市のネットワークで国家の枠組みを超えるという考え方だったと思うので、ネットワークは今もあると思うが、もっと強調してもいいのではないかな。
- ・来週、鶴岡市と同じユネスコ食文化創造都市のマレーシアのクチン市に行く予定。例えば、ユネスコ食文化創造都市同士（まずは近場のクチン市や中国の成都市等）、互いにアンテナショップを設置してみるのも面白いかも知れない。いきなり人の交流を検討していくのはハードルが高いため、まずは食文化や食材から交流していき、次のステップとして人の交流を進めていくようなイメージとなる。
- ・食文化も観光に結びつけ、ウイズコロナで社会が回復していけるような施策をどんどんやってもらいたい。

産業強化イノベーション

(委員)

- ・バイオに特化する形で生命科学や理工系の推進があるようだが、社会科学や人文科学は力を入れないということなのか。例えば、サイエンスパークのレンタルラボは産業集積の観点からバイオ関係であることが前提になっており入居できないようだが、どうなのか。
- ・赤川や鳥海山がすごく綺麗に見えるようなところに、第2サイエンスパークを作ってもらい、そこで人文系の人々がゆったりと研究を行ってもいいと思う。

- ・サイエンスパークでの研究・技術開発について、例えばヘルスケアのサービスなどに還元する仕組みを作ったり、うまくデータ連携し地元の産業としながら形作り、市民にメリットなどを与える仕組みなどを考えてもらいたい。
- ・サイエンスパーク関連で出た世界的な業績は、新聞等でも報道されて市民に伝わるが、日常生活にそれが反映されるという次のステップが必要かもしれない。

城下町鶴岡リブランディングプロジェクト

(委員)

- ・歴史文化の学びの充実に関連して、建物そのものを勉強するみたいなイメージが強い。鶴岡の特徴は、歴史的な建築があって、それと一緒に歴史的な暮らし、生活スタイルも残っている、ここに来るとそういう暮らしができるという目線をもった街だと思うが、そういうことも強調するような視点でまとめてはどうか。
- ・歴史的建造物の保存活用に関連しては、例えば手向の宿坊の街並みの修景事業を市が支援しているが、歴史的な営み、古くからの営みをしている生活世界があって、その街並みを整備しているという強調があってもいいのではないか。
- ・最近、マレーシアから友人が来て鶴岡市内を案内したが、鶴岡公園等の街の中心に腰を落ち着けてゆったりできる場所が少ないという話があった。例えば鶴岡公園内、ないし公園が眺められる周囲にカフェやレストランがあれば、街のヘソとも言える鶴岡公園の周辺に人が集まり、滞在時間が延長し、鶴岡公園を拠点にして鶴岡市の様々な場所に行けるような拠点になり得るのではないか。市内観光のエントリーとして、まずは鶴岡公園周辺に行き、周辺をゆっくり滞在・回遊できるようなカフェ等のサードプレイスのような場所があると、観光や街の賑わい作りの視点からでもよいと考える。
- ・以前から例えば大宝館の1階を喫茶にしてはどうかという議論もあった。文化財という絡みもあることから、今後どうしていくのか議論がやはり必要なのではないか。
- ・もっとフラットに開放した方がいいとは思いますが、価値を守るという視点の方もいることから議論が必要だと思う。
- ・民俗芸能のデジタルアーカイブ化に関して、アーカイブするとストックになってしまうので、ストックフローという考え方があるので、活動として実際に検証していくようなことを応援するような取り組みが必要ではないか。
- ・デジタルアーカイブは、ただ懐かしいで終わってしまいかねないので、例えば、民俗芸能を子供に伝承するプロジェクトを応援するとか、そういう地域に集中的に資源を投下するなどしてはどうか。
- ・大河ドラマ「どうする家康」などと観光の復活を結びつけられるのではないか。

輝く女性活躍推進プロジェクト

(委員)

- ・「輝く女性活躍推進プロジェクト」という名称自体が男性目線かもしれないが、大丈夫か。「自分らしく」を冒頭に入れ「自分らしく輝く女性」みたいなものもあるのではないか。
- ・輝く女性活躍のターゲットをどのあたりに設定しているのかがわからない。
- ・仮にロールモデルが設定されたところで、人それぞれなので、ただのマウンティングとしか捉えられないこともあり、扱いが難しいと思う。
- ・共感し合える、愚痴り合えるというのが女性の中では一番大事だと思うので、そういう場を作る方がいいのではないか。

地域国際化 SDGs 推進プロジェクト

(委員)

- ・鶴岡にはさまざまなことを実証実験できる場所がある。いろいろな取り組みを鶴岡でやってもらって、東京ではできないこと、鶴岡らしさ、庄内らしさを出してほしい。どこかにあるようなところを真似てもしょうがない。
- ・都会ではできないことがあり、人口が少なくても幸せでいれたら嬉しい。

その他

(委員)

- ・各プロジェクトチームに女性は何人入っているのか、割合を聞きたい。

(職員課長)

→職員の男女比率は女性が4で男性が6になっている。プロジェクトチームが全部その割合にはなっていない。一律、この委員会この会議は、男性だけとか女性だけといった定義にはなっていない。